

八重山の学校教育における郷土音楽の実践

大山 伸子

沖縄県立芸術大学

沖縄県八重山諸島の小・中・高等学校における郷土音楽導入の現状を把握する手掛かりとして、音楽担当教諭を対象に行ったアンケート調査の結果、高実践率が示され、小学校の集団学習をベースに中学校での継続学習、さらに高校における専門学習の実践と、初等教育と中等教育の「縦軸」が有機性を保持していることが明らかになった。また、郷土音楽の導入を容易にしている地域要因、生徒要因、学校要因が、地域社会に存在するさまざまな伝統行事と相互に結びつき、郷土音楽学習を有用なものにしていることも顕著となった。加えて、児童・生徒の学校教育における「三線」の学習過程や、地域における伝統行事の実践事例を紹介する。

Local Music Teaching At schools in Yaeyama Islands

Nobuko Oyama

(Okinawa Prefectural University of Arts)

The result of a survey, through questionnaires for music teachers to find the present status of teaching of local music at the primary schools, junior high schools, and at senior high schools in Yaeyama Islands, Okinawa, showed a high rate of introduction of Yaeyama local music in school education. The survey indicated the fact that group learning at the elementary schools, continued teaching of the subject music in junior high, and more extensive teaching in senior high schools are well linked thematically in introducing local musics in school curricula. Three contributing factors are of regional, the students, and the close relationship between the schools and the communities in which these schools were located.

I はじめに

筆者は既存研究として1993年9月、沖縄県の中学校における郷土音楽導入の現状を把握する手掛かりとして、県下全中学164校の音楽担当教諭を対象にアンケート調査を行いその結果から、「実践の必要性を感じている」教師が99.1%であるのに対し、「導入している」が65.5%となり、両者の落差に、教育現場の実状が浮かび上がってきた。最も導入率の高かった八重山の中学校においては93.3%の際立った実践率が示されたが、その背景として、学校教育と地域の伝統行事が密接に関わり合いを持ち、有機的に機能していることが特徴として上げられた。

その研究結果を踏まえて見ると、八重山におけるこの現象は単に中学校のみに顕在するのではなく、小学校においてすでに土壌が形成され、中学校を経て、さらに高等学校で継続的な学習が実践されているのではないかと、いう仮説が立てられた。今回さらに、八重山の小・高校における郷土音楽導入の現状を実態調査し、実践事例に基づいた考察と、加えて、八重山の地域社会に存在する伝統行事や、生活を取り巻く音楽環境の在り方が、学校教育にどのように関わり合いを持ち、郷土音楽を有用なものにしているか、本稿の研究目的として論述するものである。

II 八重山の学校教育における郷土音楽導入の現状

1 八重山諸島の概略

八重山諸島は琉球列島の南端に位置し、大小31の島々からなる島嶼で、宮古諸島と総称して<先島>とも呼ばれる。八重山と沖縄本島の距離関係は、例えば県庁所在地那覇市を地図上で東京に置き重ねて

みると、石垣島は和歌山県境に位置し（南西約410km）、八重山諸島の最西端、与那国島はおおよそ香川県に位置する。（南西約520km）⁽¹⁾。有人島は、教育、文化、政治、経済、交通の中心地である石垣島（1島1市）を主島として、竹富町所轄の西表島・波照間島・黒島・小浜島・竹富島・鳩間島（以上には小中学校が存在）、新城島（上地島・下地島）・由布島と、与那国町所轄の与那国島（小中学校存在）の11島で、八重山の人口は、平成6年7月1日現在、46、375人である。⁽²⁾

沖縄県の文化圏は通常、沖縄本島、宮古島、八重山諸島に3区分されるが、八重山の芸能を大別すると神遊び、舞踊、演劇、太鼓、歌謡に分けられ、それらは祭事や農作業から生まれ伝承されてきた。⁽³⁾

民謡は作業歌と節(ふし)歌に大別され、作業歌には、ユンタ、ジラバ、アヨーがあり、いずれも古くから歌いつがれた歌で、後にユンタ、ジラバは、三線の伴奏で歌われるようになり、節歌となった。⁽⁴⁾

また、各地域で行われる伝統行事は、ほとんどが豊饒祈願、収穫儀礼、先祖祈願であり通常、旧暦で行われる。代表的なものは、<豊年祭(フーイ)>や<結願祭(キツガ)>、<盆アングマ>、<海神祭(ハリイ)>、<弥勒(ミツ)>、<獅子舞>、<節祭(ツイ)>など各地域ごとに行われる祭事と、竹富島の<種子取祭(タヅリ)>、鳩間島の<カムラーマ>のように、その地域のみ祭事があり、さらに、イベントとしての<トゥバラーマ大会>など、年中行事は豊富である。

2 郷土音楽導入のアンケート調査について

八重山の小学校・高等学校における郷土音楽導入について、音楽教諭を対象に行ったアンケート調査結果を分析、考察する。

この調査の目的は、第一に八重山の学校教育では、どのように郷土の音楽を位置付け、実践しているかを大局的に把握すること、第二にそれぞれの地域に存在する芸能や伝統行事に、児童・生徒がどのように参加し関わっているか、実例を通して把握することである。

(1) アンケート対象学校の概要

八重山に所在する学校は、小学校33校（他私立1校）中学校21校、高等学校3校で、その内、小・中学校併置校が1校ある。（図1）

平成6年5月1日現在、小・中学校の児童・生徒の学校在籍数は、小学校4,973名、中学校2,615名で⁽⁵⁾、高等学校は、八重山高校987名、八重山商工高校595名、八重山農林高校433名である⁽⁶⁾。八重山諸島は、行政・商業・交通機関が集中し都市機能を有する通称四箇(しよ)と、呼ばれる市街区と、それを中心として

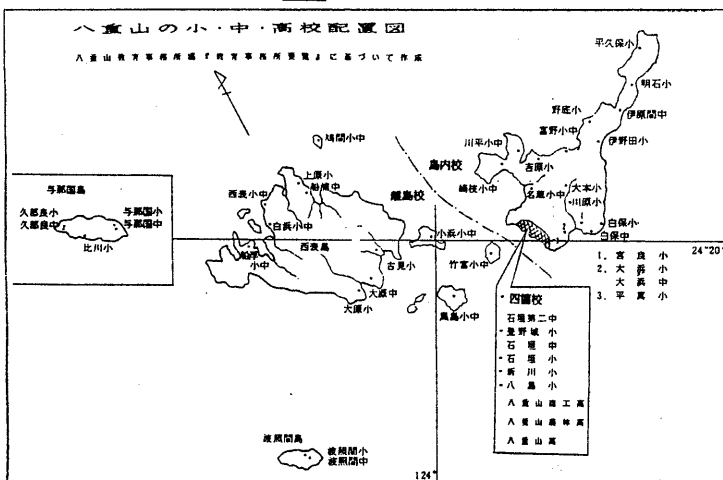
陸路で結ばれる島内周辺区、それに海路及び空路で結ばれる離島区に区分できる。

アンケートの調査・分析は、上記の3区分に基づき、石垣島内に所在する小学校19校の内、四箇(しよ)4校（以下四箇校と呼ぶ）と、それ以外の島内校（以下島内校と呼ぶ）15校、それに石垣島外（以下離島校と呼ぶ）14校の3ブロックとした。また、高等学校3校は石垣市内に所在している。概して、島内北部や離島の学校は過疎区域が多く、複式学級の授業形態が主である。

(2) 調査概要

♪調査期間	1994年9月14日～9月30日	♪回答者	沖縄県八重山全公立の小学校33校と高等学校3校の音楽担当教諭
♪調査方法	郵送法。質問用紙(Q1～Q6)を郵送し回答者が記述、返送する	♪有効回答数	36件(小学校33、高校3)
♪調査表	大山が作成し収録(別表1)		回収率100%

図1



(3) 調査結果と考察

ポイント1 音楽教科担当教諭の配置状況

小学校の音楽教科担当教諭は、音楽教科のみを担当（専任）する場合と、複数教科担当の一教科として音楽を指導する場合とがある（兼任）。33校中、専任校はわずか5校であり、児童数の多い大規模校に配置されている（資料Ⅰ-①②）。中規模校や、島内北部、離島のように複式学級の編成校では、兼任が通常のものである。しかし、この調査結果によると、郷土音楽導入校は31校あり、音楽専任校と兼任校の郷土音楽導入の格差はみられない。また、高等学校は3校とも音楽専任が指導し、八重山商工高校では、人文科に専門科目「郷土文化」が設置され、郷土音楽に精通した歴史担当教諭が三線の実技指導と郷土史を担当し（舞踊は地元の熟練招聘講師）、郷土文化の総合的な教育課程となっている。

ポイント2 実践率について

小学校で郷土音楽を授業に取り入れている学校は、93、9% (31/33 件) と高実践率である。前述したように、既存研究「沖縄県の中学校における郷土音楽導入の現状と方向性」⁽⁷⁾ において、県下中学校の内、八重山の中学校が93、3%の際立った数字であることが明らかになったが、今回の小学校の場合、ほぼ同率の導入である（資料Ⅱ-①②）。この結果は、中学校の前段階、初等教育の場においても、既に郷土音楽学習の土壌が形成されていることを示している。また、高校においては、3校中2校の八重山商工高校と八重山農林高校が実施しているが、八重山商工高校は、より専門的なコースを設置している。（資料Ⅱ-③）

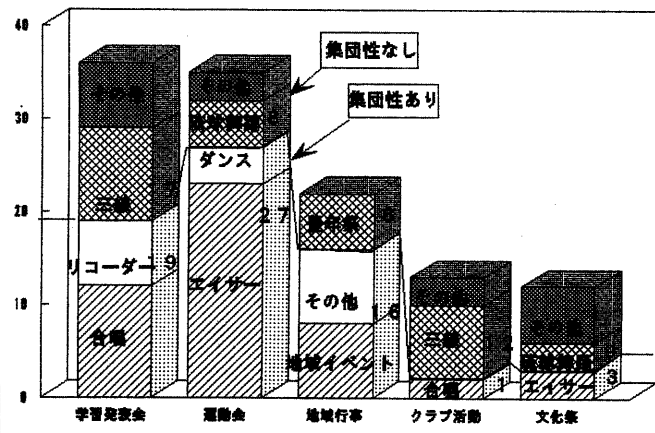
ポイント3 授業形態について

郷土音楽を授業へ導入する形態は、83、9% (26/31件) が主に不定時（随時）に行われており、定時にカリキュラム化されているところは12、9% (4/31 件) と少ないが、課外授業での実践率は100% (31/31件) となっており、教科カリキュラム化にこだわらず、課外授業を有効に生かしている傾向がある（資料Ⅲ-①）。

さらに、その実践内容を見てみると、＜運動会におけるエイサーの実践＞が74、2% (23/31件) とかなりの割合になっている。本来、八重山地域にエイサーの伝統行事はなく、戦後、沖縄本島から移り住んだ人々によって流布されたものと考えられるが、学校への導入背景は、文化の継承や郷土愛といった要因よりもむしろ、指導方法の容易性が考えられる。エイサーは、比較的教材化し易い利点と、集団学習に適した要素を併せ持ち、広域性はこれらのことが要因していると思われる。この容易性は、実践率の高い項目に上げられている＜学習発表会における合唱＞が38、7% (12/31件)、＜リコーダー演奏＞22、6% (7/31 件) の場合も同様のもので推察できる（図2）。

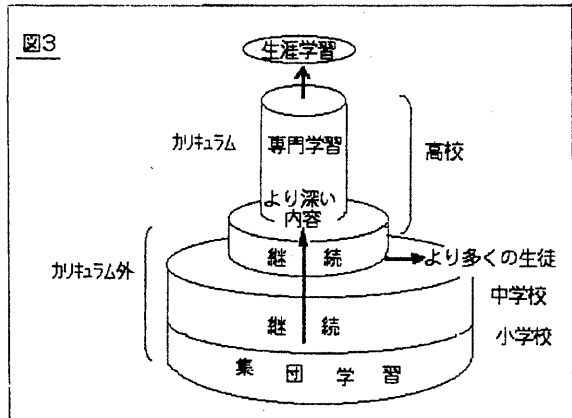
つまり、学校における郷土音楽導入のあり方は児童・生徒が参加し易い集団演舞、演奏、合唱といった形態が多く見られ、学校という集団学習の場ではこの授業形態が最も効果的で有効な指導方法であることを示している。高等学校の場合、実践している2校のうち、「芸術科・音楽」の授業でカリキュラム化している八重山農林高校と、人文科の「郷土文化」で専門教科として、三線、舞踊、郷土史をカリキュラム編成している八重山商工高校がある。人文科で学ぶ生徒たちは、他に「芸術科・音楽」の授業もあり、教科書によるいわゆる西洋音楽中心の授業も受講している。課外授業は商工高校が実施しており、吹奏楽クラブや運動会のためのエイサーの練習が項目に上げられている。また、農林高校は、八重山地区の音楽発表会などの場に向け、随時に導入している。

図2 課外授業の実践内容



八重山の小・中・高校の郷土音楽導入を階層別に捉えてみると、小学校の学習方法は、カリキュラム外で全児童生徒が参加し易い集団学習が主であり、より多くの児童が学んでいる。中学校においても同様の方法が継続され、やや学習内容が深いものになっている。

これら土壌の上に立って、高等学校では特定の生徒が、カリキュラム化された郷土文化の専門学習を中心に、さらに、深い内容を学んでおり、小・中・高校と有機性を持った体系が形成されている。(図3)



ポイント4 指導内容について

§1 使用楽器 小学校の場合、パーランクーが18件で最も多く、太鼓16件、三線、リコーダーが14件である(資料Ⅳ-①)。主に打楽器類であるが、これは、エイサーによる演舞のための使用楽器と思われる。またリコーダーは、小中高校全般に教育楽器として活用されているものであり、小学校においては、ソプラノ・リコーダーの斉奏、中学校、高等学校ではアルト・リコーダーが加わって、アンサンブルの授業方法がなされている。

§2 教材曲名 72種類(150件)が教材曲として挙げられている(資料Ⅳ-③)。これらを㊸群(他地域にも広域性を持つ曲)、㊹群(八重山で広範囲に使われている曲)、㊺群(特定地域のみに使われている曲)、㊻群(比較的新しい民謡でポップス調の曲)に分類した。

㊸群は最も多く27種類(70曲)であったが、これらは八重山のみならず、広く沖縄県内あるいは県外でも歌われる曲である。その中でも<安里屋ユンタ><じんじん><ていんさぐの花>は活用度が高く約4割を占めている。安里屋ユンタは、もともと竹富島の民謡であるが、県外でも耳にする程広く親しまれている曲である。また、エイサーの使用曲が多数あり、<唐船ドーイ><クーダーカー><七月エイサー>は沖縄本島のエイサーでも、最も耳目に触れる曲である。<於茂登七月エイサー>は於茂登山の麓に位置する川原や大本の土地で沖縄本島から入植した人々によって歌い演じられてきた曲と思われるが、商工高校の運動会ではエイサーの演舞としてプログラミングされている。野底小学校では宮古の<クイチャー>が演じられ、戦後、宮古島から入植した住民の土地柄を反映している。

㊹群は八重山民謡で広く歌い演じられている曲であり、30種類(58曲)が挙げられている。<月ぬ美しゃ><えんどうの花>は馴染み易い旋律であり、教材曲に適當であることがわかる。又、<鷲ぬ鳥節><鳩間節><ついでんら節>などの節歌が多く挙げられ、<まるま盆山><デンサー節>など、三線と踊りの曲で半数を占めている。

㊺群は各地域で演じられている曲で、9種類(10曲)あり、その土地柄を特徴付けるものである。例えば川平の<川平の子守歌>、与那国島の<与那国小唄><ニチヌサンアイティ><比川村><マコンガニユンタ>、小浜島の<結願祭の歌><お盆の歌>など、その地域ならではの曲で、祭事の性格が強い曲である。

㊻群は比較的新曲でポップス調の曲であり、6種類(11件)挙げられている。<島唄>は全国的に流行した曲で中学校のエイサーなどに使われ、<ミルクムナリ>は高校の体育祭で女子の創作ダンスに演じられている。これらの曲は、現代の子ども達に好まれる曲で古典民謡に比して活用し易い利点がある。使用教材曲を概観してみると、㊸群が最も多用され、㊹群は種類では㊸をわずかに上回り、両群で全体の約8割を占めた。㊸群の広域性のある曲は、学習の場や方法を問わず、広く活用されており、㊹群の八重山民謡は地元で愛唱されている代表的な曲ばかりであり、教材としての利用度も高い。

§3 指導内容と授業方法 指導内容は、歌唱指導、合奏指導、舞踊、エイサー等で、いずれも学校の集団性を生かした指導方法といえ(資料Ⅳ-④)、ポイント3の課外授業についての結果とほぼ同一で同じく学校の集団性の有用性を生かしているといえよう。

歌唱指導は合唱、斉唱、輪唱で特異な例に八重山民謡のユンタのかけ合いがあり、教師の指導の工夫

が見られる。合奏では洋楽器と和楽器（民族楽器）が混在しているが、①民謡を洋楽器で奏する方法、②民謡を三線と歌で奏する方法、③民謡を和洋楽器で奏する方法の3タイプがある。三線や和太鼓、笛などは、技術習得が容易でないため、演奏できる児童たちが担当し、リコーダーや鍵盤ハーモニカの教育楽器を主体に、合奏を楽しむ授業形態になっている。

ポイント5 学校教育と地域活動の関わりについて

§1 郷土音楽が導入され易い環境の有無 導入の背景要因として、「八重山は他地域に比べて、導入が容易であるか」との質問（Q6）に、84、8%（28/33件）が「容易である」と回答しているが（資料Ⅶ-①）、導入し易い要因として事例の中から3要因に分類する。

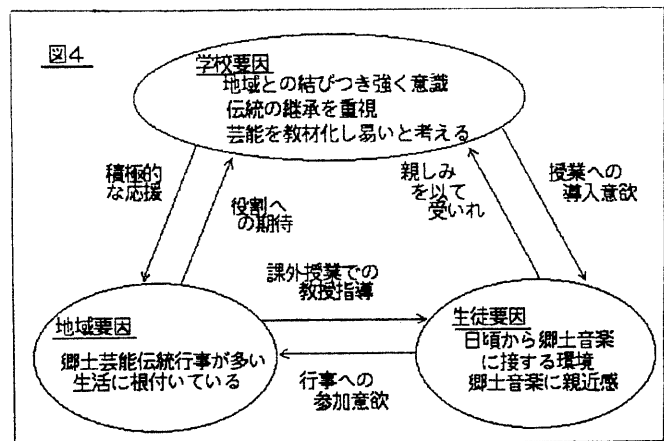
第1の「地域要因」は、八重山地域の持つ特性が要因となっているもので、12例（14件）あった（資料Ⅶ-②④）。その特性とは、地域に郷土芸能、伝統行事が数多くあり生活に根づいている、といった内容で、<地域行事の中に歌、踊りが多い><地域的に民謡に親しむ機会が多い><歌の島、芸能の島といわれている地域><地域に民謡がしっかり根を下ろしている>などが、事例として上げられる。

第2は「生徒要因」で、八重山の児童・生徒自身の持つ特性が導入の要因となっているもので11例（17件）が挙げられている（資料Ⅶ-②⑤）。その特性とは、児童・生徒は日頃から、郷土音楽に接する環境にあり親近感を持っている、といった内容で、例えば、<幼い頃から、郷土音楽に慣れ親しんでいる><家でお年寄りから教わっている><三線が身近にある>などである。

第3は学校要因で、八重山の学校教育や教師の指導の方向性が導入の要因になっているものが17例（19件）あった（資料Ⅶ-②⑥）。その特性は、学校と地域社会の結びつきが強く、伝統の継承を重視し、教材化し易い芸能がある、といったものである。例として、<身近にわらべ歌やユンタなどが多く授業に取り入れ易い><地域と学校の結びつきが強い><郷土の音楽を大事にしようと言う考え方が重んじられている>などである。

当然ながら、導入の容易さを考える上では、それぞれの3要因が相互の動きを誘発するものと考えられる。

結論をまとめてみると、地域要因として、各地域の伝統行事が生活と密接に結びついていること、生徒要因として、児童・生徒は、地域行事への参加や見学を通じて郷土音楽に親近感を持っており、すでに受け入れ易い素地が存在していること、さらに学校要因として、学校側も地域との関わりを意識し、積極的に協力する体制であること、の3要因が有用に機能していることである。（図4）



§2 地域行事や活動と、学校教育の相互関係

学校と地域が、ごく自然な形で結びついている例は、表1の通りであるが、四箇校の場合、豊年祭には一部の児童が参加したり、ハーリー（海神祭）には職場代表で教職員が参加するなど少人数の関与であり、比較的生活との密着度が薄い。これに対し、島内校は、学校ぐるみで積極的に地域の祭りに参加している。さらに離島校では、児童・生徒自身が地域の伝統行事に欠かせない役割を担っており、より深く生活に密着した結びつきとなっている。

具体例として、離島の小浜小中学校の場合、11月の結願祭には、小中全校児童・生徒が参加し、踊りや三線の地謡を演じ、一人ひとりが祭りの重要な役割を担っている。祭りの数週間前の毎晩、大人たちの教授の元に児童・生徒が練習を行い、島ぐるみの取り組みとなる。そして、結願祭は3日間行なわれ、1日目の各御嶽の朝願（アサガヒ）から奉納芸能に入り3日目終了後のブガリ直し（慰労会）まで子どもたちは同行するのである。この学校は、地域行事が学校行事よりも優先され、学校の行事設定は、地域の祭りや慣例を全面的に優先して、年間行事に組み込むのである。

これらの地域は人口が少ないため必然的に全住民が参加する状況にあり、お年寄りから子どもまで個々の役割分担を持ち、ごく自然な形で伝統行事が受け継がれ、理想的に郷土音楽学習がなされている。つまり、郷土音楽が教室に持ち込まれるに留まり、授業の発展性や継続性を欠いた、いわゆる切り取り教材化のような学習方法ではなく、子どもたちが生活と共に育んでいる郷土音楽が、そのまま教室に持ち込まれ、生きた教材として活用されているのである。

§3 学校と地域の関わりを通じた学習形態 ポイント3で述べた、学校教育における郷土音楽の授業形態は、集団学習による教材化の容易性が特徴的であると述べたが、学校と地域の関わりを通じた郷土音楽学習のあり方を見てみると、学校が主体的に参加する「学校主導型」と、学校が容認する「地域主導型」に分類することができる(表1)。事例によると学校が積極的に地域に関わっている「学校主導型」が多く見られ、その参加内容は、集団性を生かし、教材化し易いものを中心に指導がなされ、教授者は学校の教師である。

一方、「地域主導型」は、児童・生徒が、地域行事に役割を持って参加することを学校が容認するタイプで、その参加内容は、個々の地域行事に合わせた特別な指導が行事の都度なされ、内容は極めて多様で複雑である。また、教授者はその道の熟練者や子どもに身近な人々であり、周辺の大人が教師の役割を担い積極的な働きかけを行って、有形無形の教育効果を上げている。

これらのことから、児童・生徒の郷土音楽学習のあり方は、学校という集団の「学習の場」を有用に生かした方法であり、それらは又、さまざまな地域行事における「発表の場」を経験することによってさらに学習効果を上げている。

郷土音楽学習の視点から学校と地域社会を見てきたが、学校は、地域社会との接点をどのように捉え教育に生かしていくかを考え、地域活動は児童生徒にとって、第二の教育の場であることを十分に察知し、量的、質的に関与していくことが重要といえる。

III 結び

この研究を通して実感した事は、八重山における郷土音楽の実践は、教師と、児童・生徒が極めて自然体で、指導し学んでいるという事である。そこには「すべき論」は存在せず、アイデンティティーが強調される様な気張りも見られない。個々の生活が教授の場であり、地域社会が学習の場なのである。

このような八重山の教育的背景は、他地域に比べ郷土音楽が導入し易いという有利性はあるものの、これまでの拙論において、郷土音楽導入に対する学校教師の指導工夫や、学校と地域社会の関わり方など、実践の方向性を導く多くのヒントを見る事ができた。例えば、学校における郷土音楽の「音楽科」としてのカリキュラム化の是非である。これまでのデータによれば、定時にカリキュラム化している学校はわずか4校であるが、課外授業においては全小・高校が実践している。郷土音楽が学校で定着している特徴が、授業時間設定ではなく、課外時間を有効に生かしている点にあり、このことは、他地域への有為な示唆となるはずである。また、郷土音楽の教材化について、現状は教材曲の選定に系統立てた基準がなく、親しみ易く馴染み易い曲の範囲で選曲され指導されている傾向があるが、系統性を持たせるためには、例えば、小・中・高校のレベルに相応する基準設定や、難易度を標準化した選別を明瞭化し、テキスト作成する必要があるだろう。

また、小中高校における学習の体系は、前述の考察によると、小中校においては、より多くの児童・生徒に興味を持たせる体験的集団学習が主であり、高校においてはより深い内容を学習させるための専門的な指導が構図として形成されているが、この連係の延長線上に、さらに生涯学習としての発展性を見ることができるのではないだろうか。(図3)

八重山の郷土音楽学習のあり方は、学校と地域社会の行き来の中で生まれ昇華したものであり、生活に根付いた音楽学習として、生涯学習に及んで継続されていく可能性を示唆するものとする。

註(1) 『日本大百科全書・4』小学館、昭和60年、p.112 (2)「沖縄の統計」沖縄県企画開発部統計課p.3

(3) 『沖縄大百科事典・下』沖縄9447社、1983、p.704 (4) 左と同じ、p.711

(5) 「教育事務所要覧」沖縄県教育庁八重山事務所、平成6年、p.17-20

(6) 「学校要覧」八重山高等学校、八重山商工高等学校、八重山農林高等学校、各平成6年度版

(7) 大山伸子「沖縄県の中学校における郷土音楽導入の現状と方向性」県立芸術大学紀要第2号 P.45-74